

# 「座談会 女性からみた戦前のまちと暮し」から



●●●●●  
商家のおかみさんを招いて開催された座談会。出席者は  
いずれも伝統ある商家の屋台骨を裏から支えてきた方々  
である。

近・現代専門部会 山 本 多佳子

## はじめに

市史編さん委員会近・現代専門部会では、文献史料を収集する傍ら、実際の体験者の方々からの聞取りを積極的に行っている。聞取りによって、文献史料だけでは窺い得ない当事者のみぞ知る貴重な証言を得ることもあるし、また、本当のところ、聞取りでしか知ることのできない、歴史をみる上で重要な事がらというのはい多いのである。とくに、一般庶民が主人公である事がらは、聞取りでしかわからない場合が殆どである。政治運動を例にとれば、リーダーたちの動向や考えは史料にも残されてゆくが、一般の参加者たちの動向や思いは、史料から間接的に推察するのが精々なのだ。ましてや、一般庶民の生活の変化といったことでは、なおさら聞取りに頼らざるを得ない。

『甲府市史』は編さんの主眼を、民衆の生活の実態を明らかにする点においており、この点からも市民からの聞取りを、今後とも積極的に進めてゆく必要があると考えている。また、聞取りをするに「このことについては〇〇さんが生きていれば、よく知っていたよ」

と言われることが多くある。歴史的な聞取りは、まさに時間との競争でもあり、この意味からも、より多くの貴重な証言を残すべく仕事を進めてゆかねばならないであろう。

当専門部会では、以上のような見地から第一回目の座談会として農業・農民運動関係者をお招きして、戦前の農民生活についての聞取りを行ったが（鳥袋善弘「一九二〇—三〇年代における甲府市周辺の農村生活」『甲府市史研究』創刊号参照）、今回は、その姉妹編として、従来、農村の生活ほどには注目されなかった商家の生活について、甲府の由緒ある商家に生まれ育ち、嫁いだ「おかみさん」がた（後述するように、甲府の商家では主婦をおかみさんと呼んだ）をお招きして座談会を開催した。

甲府は商人と職人のまちとして繁栄してきたのであるが、その屋台骨を幾代にもわたって支えてきた、伝統ある商家には、どのような生活文化が育まれていたのだろうか。日常の生活ぶり、年中行事、奉公人の働き方、商家の主婦の役割などについて、五—六時間の長きにわたってお話をうかがった。本稿は、その要約である。

まず、内容の紹介をするに先立って、座談会に出席していただいた、「おかみさん」がたのご紹介をしよう。

名取淑子氏——山田町に生まれる。父は甲府市長・貴族院議員を歴任した名取忠愛氏（一八六六—一九四八）。名取家は現在まで九代続いており、もともとは綿商であったという。成功して財を築き、その財力を背景に、県内の金融界に草創期より参画してきた。また、名取家は大地主であり甲府市近郊を中心に大正一〇年頃は五六町歩の小作地を有し、毎年穀で一〇〇〇俵ぐらいの小作米

が納められていたという。夫君の名取忠彦氏（一八九八—一九七七）は、塩山の広瀬久政氏（代議士）の三男で、戦争中は、県翼賛壮年団長として活躍され、戦後は山梨中央銀行の頭取を長く勤められた。先年、名取淑子氏は夫君の追悼としてサンケイ新聞山梨版に「回想名取忠彦」と題した回想記を連載され、その後連載をまとめた『たどりしあと——回想名取忠彦』（五三年六月刊）を出版して好評を博した。

高野きよ氏——中巨摩郡敷島町長塚の三井家に生まれ、大正五年、数え年の一七才で柳町の吉字屋、高野家に嫁す。一六代高野孫左衛門（高野毅・一八九九—一九六六）氏夫人。高野家は吉字屋の称号を武田家より受けた由緒ある塩商で、戦前は塩と油の卸商であった。夫君の高野孫左衛門氏は、若い頃は日蓮主義者としても知られ、また昭和一七年の翼賛選挙では翼賛壮年団からの推薦候補となって衆議院議員にトップ当選している。戦後は「不生禅」の研究や、社会福祉にも力を入れた。

小野俊子氏——柳町に生まれる。生家は柳町の海産物問屋「岩田屋」で、父は二代目岩田吉助氏。昭和一五年、戦後、県会議員などを務め、県政界で活躍された小野熊平氏と結婚。義父の小野里平氏は一代で小野興業を築いた人で、市内の映画館の殆どが氏の経営であった。また、政治家の出入りの多い家でもあったようだ。小野俊子氏は夫君ともども、甲府市関係の各種役員などをされて活躍中である。



— お招きした方々 —

左上より

原 忠 三 市長  
高 野 き よ 氏

右上より

名 取 淑 子 氏  
若 宮 きよの 氏  
小 野 俊 子 氏

若宮きよの氏——柳町に生まれる。生家は吉字屋高野孫左衛門の分家に当たる砂糖商の吉字屋、野尻家である。一四代高野孫左衛門が懇意にしていた与力の野尻氏が、維新で西山（南巨摩郡早川町）へ流された際、その名前を継ぐことを懇請されたので、後に次女に野尻の名を名乗らせたもの。この次女が若宮きよの氏の母君で、高野家を継いだ長女が、高野きよ氏の姑に当る。昭和五年に、若宮竹治郎氏と結婚。若宮家は江戸時代、甲府に住みついた水戸藩士が画才を生かして紺屋となった家であったが化学染料の発達で、結婚された頃には己に紺屋は廃業されていたという。若宮きよの氏は長年、お料理の先生として、広く活躍を続けられている。

以上の四人の方々に加えて、原忠三甲府市長が公務のあい間をぬって一時間ほど座談会に出席され、生家の製糸業（原氏の生家は伊勢町の製糸屋で、父は原茂三郎氏。祖父の代に創業し、五〇人位を雇って操業していた規模からいえば中堅どころの製糸屋であった）と製糸家の生活ぶりなどについて話をしていた。

聞き手の側は、近・現代専門部会から、坂本徳一、有泉貞夫、竹山護夫、鳥袋善弘、齋藤康彦、山本多佳子の六名が参加し、また、オブザーバーとして民俗・美術工芸専門部会から、服部治則、小沢秀之両委員が出席した。市史編さん担当事務局には小池主幹・高木主査以下座談会の開催・運営について多々ご尽力をいただいた。

なお、座談会が開催されたのは一九八六年七月一日、甲府市自治研修センターにおいてである。

（文中、敬称を省略させていただいた部分があることを予めお断わりいたします。）

## 一 商家の女性のくらし

昔の商家は、お盆と正月を除いて年中無休であった。「今から思えば、昔はよくやったものでございますよね」と高野さんは当時を振り返るが、商家の朝は早く、毎日五時には始まり、夜、床に就くのも、かなり遅くて、一〇時すぎてからであったという。高野さんに吉字屋の一日を紹介していただく。

「主婦と手伝いの女の人たちは朝のお炊事の仕度がございまして、から、五時には起床いたします。朝はとっても忙しくて、綺麗に身づくろいなどする暇はございません。ただ髪だけは乱れたままでは具合が悪いので、かき上げておりましたが、髪など丁寧にするのは食事が終わったあとで、御飯前は無理でございましたね。

炊きものの湯気が立つ頃には家中の者が起き出しまして、家の外から内からのお掃除をいたします。各人の分担というのがございまして、子供たちも学校へ行くまえにお掃除をさせました。学校へ行くから分担は少しにしてやりまして、廊下をちょっと拭く程度。それでも必ず、それだけはしてゆくものだと思っていたようにございます。

食事は、箱膳というものがございまして、中に、めいめいのお茶碗、お箸、お碗、湯呑と地木綿のお布巾が入ってございまして、いつもはお台所の隅に積んでございます。

店の人たちは、その銘々の箱膳で食事をいたしました。家の者は食卓でいただきますので、私はそのお給仕をいたしました。食べ終わった後は食器などの後片づけを手伝います。大人数ですので、衛生には気を使いましたね。

片付けが済みますと、お仕事が順に待っておりまして、まずお掃除でございますね。店と奥の境の戸を朝夕みがくと、きれいでございまして、朝夕、乾いた布でみがいておりました。お掃除は毎日、朝夕二回いたしました。

お昼はきつちり一二時で、お昼の仕度をして、それが済みますと、お裁縫とか色々お仕事がございます。そういうようなことで、ずーっと時間が取られておりました。奥の居間にはおこたがございまして、よくおこたというものは昼間あたるものじゃないと言われておりました。夕ごはん済まして、お湯が済んでからおこたにあたるのでございます。そうでなくても、昼間はあたってゐる暇はございませんでしたね。

夜は閉店すると、店の戸を半分閉めておきました。雨戸が上下二段になっておりまして、『お客様はもう終わり』というこで下の戸だけ落しておくわけです。店では夕食が済みましてから、番頭たちが算盤を教えたり、また銘々でお習字の練習をしたりしておりました。女の人たちは、夜なべの手仕事をいたします。

そして、一〇時になりますと、私どもの家では儀式のようなことがございまして、拍子木持ちまして、ほんぼりつけて、そしてお蔵の鍵もって、都合三人、先に立ちまして、拍子木たいて、お店をしまつて、ぐるーっと火の用心と大神宮さん（柳町の大神宮。吉字屋に隣接している）の方からお蔵の方から全部みて、それで『おやすみなさい』となります。それは必ず一〇時でございました。自分の勉強のある人は、それから自分の勉強を始めたものでございます。」

吉字屋は甲府市の商家のなかでは格式のある、大きな商家である

が、店の使用人と一緒になって、主人の一家も全員で立ち働いていたことが知られる。こうした働き方は、商家の大小にかかわらず、共通であつたようだ。従つて、食事なども主人と使用人の区別なく、全く同じものを食べていた。

若宮さんによると、大体、朝は味噌汁と漬物、昼は煮物、夜はその時ときによって違ってくるが、魚が安ければ魚が入る、といった食事であつたという。野菜も魚も、八百屋さん、魚屋さんが車に積んで売りに来るので、その時ときの良いものを見つくるって献立をつくつたというが、毎日毎日のことでもあり、主婦はお惣菜づくりには苦労したものであるという。ハレの日でもないのに、魚がおかずに出てくる食事は、当時の平均的農民の食生活から考えれば、夢のような大御馳走であつた。それでも、海産物問屋の岩田屋では文句が出たと小野さんは言う。

「私の家はお魚を売っているでしょう。だから普段からお魚を食べているので、余りそういうのは出せないってわけです。そういうものばかり出すと、支配人格の上の人が怒るっていうわけ。夜はカレーライスとか豚汁とかを、ちよいちよいしないと店の者が気嫌が悪いのです。それに魚屋は割と力の要る、労働仕事ですよ。そんな食事じゃ肉ばなれがするなんて文句を言われたものですよ。」

魚町を中心とした海産物問屋は、市内でもいち早く、使用人の一ヶ月に一日の休日を公認したところであるが、こうしたところにも威勢のよい魚河岸的な気質が影響しているのかもしれない。しかし、恐らく岩田屋の例は、甲府の中でも最も贅沢な部類に入るだろう。たいていの場合は主人も同じものを食べていたこともあり、食事に

ついでに苦情は殆ど出なかったという。それどころか、使用人たちは農家の二、三男である。「おぼく」(麦飯)や「ほうとう」(野菜などを入れた煮込うどん)を常食にしている人たちにとって、白いお米の御飯が食べられることは非常な魅力であった。とくに奉公に上ったばかりの小僧さんたちは、白い御飯に感激して御飯ばかり食べるので、みんな一様に脚気になったものだそう。その予防には、御飯にあずきを入れたり麦を入れたり、また、育ち盛り食べ盛りの小僧さんたちを置いてるので魚の切身の配膳のしかたから、細かい気配りをした(魚の頭の方は上の人に、尻尾の方は下の人に行くようにつけるのであるが、尻尾の方は大きく切つてあった由——高野さん談)ものという。

食事と並んで、商家の主婦の大きな仕事は家族と使用人全員の着物の調整であった。現在のように買えば何でもある時代ではなく、下着からして手で作り、綻びれば繕わなくてはならなかったから、これも大変な分量の仕事であった。

「冬の物はどうしても四月中に片付ける、それから洗い張り(着物をほどこいて洗い糊をつけて板に貼ったり伸子張にして干すこと)をして、五月から九月までの間に冬の物は縫ってしまふ。九月が過ぎて一〇月頃になりますと、今度は夏のものを片付けるというように、一年をちゃんと区切つて着物の仕度をしました。繕いものから夜具ふとんの調整もありましたから、女の人たちはいつもお裁縫をしておりました。人数の多いお家では、お針さん<sup>はしせん</sup>を雇つて、一年中そればかりしておりました。」(若宮さん)

食・衣に関する奥向きの費用は、店の方から主婦に渡されていた。しかし、そのお金の中から、自分の裁量で自分のものを買うといっ

たことはなかったという。

商家の主婦は、家の中の仕事で忙殺されていた。

「私は専ら家の中の仕事でございまして外に向く仕事は殆どいたしませんでした。長い間勤めた番頭も沢山おりましたし、店の人も多くございましたから、その面倒をみるのが女の仕事でございました。」(高野さん)

使用人がいても少数であるとか、家族だけでやっている小さい商家では、主婦も営業そのものに関わらざるを得なかったであろうから、事情は少し異なつていたと考えられる。しかし、一見、家事労働の延長のような、商家の主婦の仕事は、専業主婦的なものではなく、「おかみさん」というのは、主婦というより一つの職業(原市長談)であった。原市長の生家の製糸場では、一〇人から二〇人の寄宿の女工さんを置いていたが、一家の主婦であった母君は毎日、大変な労働をしていたという。

「製糸屋のおかみさんというのも、とっても大変で、借金取りの言い訳するの、おかみさんのやるこんだね。親父は朝起きて飯たべると、いつもどつかへふつとんで行っちゃってね。借金取りが来るとか、嫌なことがあるときは、とくに早く家を出ちゃつて帰りは遅いわね。家の女工さんたちの賄い方から、小僧や番頭の仕切りもおかみさんのやるこんだったから、とても大変だつたと思います。」

製糸屋は相場相手の商売だから、男には面白いですよ。ちょうど私が戦地から復員してきた時に、おふくろが亡くなりまして、その時、おふくろが『製糸屋だけはやらなくて、来る嫁さんがかわいそうだから』って言い残しましてね。まあ、それで私は

給料取りになっちゃったんですがね。」（原市長）

家じゅうの賄い方などの労働に従事する大変さだけではなく、主婦には使用人をどう養育するか、どう人の和を保ち、全体をまとめるか、といった「人のつかい方」の点で、筆舌では表現できない繊細な心遣いや、人間としての器量が必要とされたものと思われる。そして、こうした気配りや器量は、学校で物を習うように習い覚え得るものではなく、長年の経験と努力を通して身につけてゆくものであった。

甲府の市街地では、主婦は殆どみな「おかみさん」と呼ばれ、「奥さん」と呼ばれるのは「ご近所では弁護士のお様だけで、うちもまわりもみな『おかみさん』でございました」（名取さん）というが、商家の女が「おかみさん」と呼ばれるようになるまでには、とても長い月日がかかったという。

「それまでは、この辺の習慣で『あんねえさん』と言われるのでございます。『おかみさん』と呼ばれるまでには、とても長く月日がかかりまして、経験を積まなきゃ『おかみさん』にはなれません。『あんねえさん』は主婦ではありませんから、実権はございませんで、私も『おかみさん』と呼ばれると、大そう出世したというわけでした。」（高野さん）

先代が亡くなって、自分たちの代になる年配に達して實禄が備わるようになって初めて、「おかみさん」と呼ばれるようになるのであり、たとえ家の中での実権を握っていても、それだけの年配にならないと「おかみさん」と呼ばれることはなかったという。このことは、商家の主婦の持っていた地位の高さと、権限の強さ、役割の重要さを物語っているといえよう。

## 二 奉公人のくらし

農家の二、三男の身の振り方の一つに「お番頭に行く」という進路があった。尋常小学校か高等小学校を卒業して、すぐに親許を離れ、商家に住みこみで奉公を始めるのである。製糸女工さんの求人については「口入れ屋」のようなものがあつたと、山本茂美の『あゝ野麦峠』などには書いているが、商家の小僧さんの求人は、知り合いのつてを頼った縁故採用で、以前に奉公していた人の親類などが、また新しく奉公に来たものであるという。製糸場の女工さんの場合も、原市長の生家では「前に勤めてた人の妹さんとか、さらには娘さんとかが来て、それこそ子供の時からみんな知ってる。どこも、そんな状態じゃなかったですか」というから、「口入れ屋」が活躍したのは、大手の製糸場に限られていたのかもしれない。しかし、こうした縁故採用というには濃密な人間関係の中から、小僧さんや女工さんを採用してくるのも、前項でみた商家の暮し方や、後述する奉公人の遇し方などを思うと、合理的な採用方法であつたといえよう。何よりも、身許が確かで、気心が知れていることが重要であつた。（求職活動の特殊な例として、紺屋の職人が各地の紺屋を渡り歩くということがあつたと若宮さんは言う。「私が嫁に来た昭和五年頃には若宮の家はコウヤをやめていたのですけど、腕のいい職人は日本中を、少しでも良い給金を求めて渡り歩くということがあつたそうです。私どものところへも、年に三、四人は来まして、うか。笠を被って、それこそ、渡世人のような格好をして来まして、慣れないものですから、はじめはびっくりいたしました。家で使うわけにはまいりませんので『わらじぜに』って言いまして、お金を

少し渡して帰ってもらっていました。」)

一二、三才から一四、五才で奉公に上った子供は、「お小僧さん」として、店から三河木綿の筒袖の着物を「おしきせ」で着せてもらい、使い走りなどの雑用から始まって、序々に仕事を覚えていった。また、前項にもあるように、閉店後、ミカン箱などを並べて机にして、先輩の番頭や主人から算盤、習字など、商人として必要な技能教育も行われていた。熱心な人は店での勉強に加えて、通信教育などの自分の勉強を睡眠時間を削ってやっていたという。

奉公人の労働条件は、厳しかった。労働時間は、朝は夜も明けやらぬ頃から、夜は遅くまで、お休みは、お盆と、お正月のかわりの二月一日の紀元節が数入り（甲府では小正月でなしに紀元節が数入りであったそうだ）で、親許へ帰省することができた。この年二回の休日の他に、業種によっては月に一回か二回、休日が設けられるようになっていった。海産物問屋の岩田屋では、「私たちが大きくなってからですが、世の中が近代化してきたということでしょうか、うちあたりでは月に一回、お小僧さんたちのお休みがありました」（小野さん）という。大正一〇年四月の『山梨公論』（山梨公論社刊）という雑誌に「公休日変更と期日統一」なる記事があり、当時の商店の店員の休業状況について次のように書いている。

「甲府市の各実業組合にては、時代の要求に依り昨年来より毎月一回若くは二回公休日を設定して店員徒弟の慰安休養を与へ居りて、之等組合の公休日現況は市内各実業組合中毎月第三日曜即ち這般前田助役在任当時、氏の幹旋に依る公休日を実施しつゝあるは三十七組合あり、又一日一五日の二回を公休と為す組合四組合、十五日を同上とするもの二組合、毎月二十三日は魚市場、二

十四日は蕎麥業、十七日は理髪及髪結組合の公休日にして、此の外全然公休日を設けざるものは売薬、宿屋、運送、提灯、時計、煙草営業六組合あり……」

休日には小僧さんたちは主人よりいくらかのお小遣いを貰い、活動写真をみたり、何か買って食べたりにして、一日を精一杯遊んだものという。年季奉公で来ている小僧さんたちには、この他、数入りで自宅に帰る際、小遣いを貰うだけで、給金は年季が明けるまでは支払われなかった。給料が支払われなくても、奉公をしている期間中は「口は預けてある」ということで、衣・食・住すべての面倒を主人の方がみたらから、それで差支えなかったわけである。しかし、親許が苦しいときは、親の方からお金を借りに来ることがあり、そういう時は、出してやっていたという（若宮さん談）。

子供の頃から他人の釜の飯を食べて働いて、年季が明けるのは満二〇才のときである。これを元服といって、元服を迎えると、大人になった、一人前になったということ、主人から羽織と帯が贈られ（元服前は、羽織を着ることができなかった）、その年の棚勘定（正月の決算祝い——後述）のときには、親も呼ばれてともに祝った。名前も、それ迄の「○○どん」という呼び方から、「○○さん」と変わり、同時に、例えば「○助」というような本名とは別の、商売上の名前をつけた。

そして次に、主家から「暖簾分け」<sup>1)</sup>をしてもらうわけである。その時期は人によって違うが、大体、結婚話が出てきたところで、「暖簾分け」——独立ということになった。主人は長年の奉公への見返りとして、独立のための資金をしっかりと出してやるわけである。砂糖商の野尻家では暖簾分けの際、主家と同じ商売はさせず、砂糖



に関連する商売——例えば菓子屋、菓子作りの道具屋、紙袋屋というように——をするようにしたという。関連する商売どうし互いに盛り立てあう意味もあったであらうし、関連した商売については、それ迄、仕事でよく出入りしていたので何となくわかり、入りやすいということがあったという。また、海産物問屋の岩田屋の場合は、暖簾分けは、主家から魚を仕入れて販売する、いわば支店を出すことであったそう。また、他の商家から見込まれて婿に行く人たちもいた。

暖簾分けをしてもらって、独立した商人として生きてゆく基礎が出来る。その後は一人一人の才覚であった。主家との関係は、棚勘定のお祝いのときに親戚同様に呼ばれて行くなど、親しい付き合いが暖簾分け後も続いた。

### 三 商家の歳時記

ひと昔まえの農村には農作業の進行に従って、田植のあとの農しあがりのお祝い、夏の虫送り、収穫感謝の秋祭り、稲の収穫後の十日夜というような行事があり、豊作を祈り、感謝し、また日頃の労働に一区切をつけて休養し、楽しんだものである。商家では、どのようなであったのだろうか。

毎月一日と一五日は「お大黒さんの日」で、その前日は押入の中まで出して、きれいに家中を掃除したあと、お蔵から「お大黒さん」の掛軸とか木像とか、家によって違ったというが、それを出してきて飾り、三方に米を三角に盛ったのと、おそなえと魚を供えた。この日の食事は、必ず「あずきごはん」で、昼には必ず尾頭つきの魚を、全員で食べたという。また、六〇日に一度まわってくる甲子

(きのえね)の日にも、大黒さんを飾って、お菓子屋さんが専用に売りに来る「きのえねさん」のおそなえを買って供えた。「きのえねさん」の日は、高野さんによると次のようであったという。

「きのえねさんの時の御飯は、おさくらごはん(醤油味の御飯)でございます。それで、これは、ばあやなんかの考えで、だったのでしょうか、きのえねさんの日は女の人が刃物を持ってはいけないと言いまして、それで、どうするかと申しますと、お夕飯は早く済ませて、いつもの夜は、夜なべ仕事をするのですけれど、その日は何もしないで、鉄も針も持たずに女の人は手仕事もなく、ゆっくりできる。そういう日が六一日目に、ちゃんとあったわけ

です。そうでない日は、どんな些細な時間でも繕い物をするとか、夜もちゃんとお仕事がございましたすね。」

商家の暮しの中にも、祈りと休養と楽しみを兼ねた、日々の生活をいろいろ小さなお祭りがあったということである。

また商売繁盛の願いをこめて、大晦日の夕飯を残りが出るように大釜で炊いて家中の者が食べ、残りを出して「食い余す」と言ったり(若宮さん談)、歳末の一二月一五日、次の年の帳簿類の調整をする日には、「来年も帳簿が増えますように、大福帳が増えますように」との願いをこめて、昼には来年の恵方の方角から買い求めてきた数の子と大福餅を振舞った。その時のお吸い物には、一つまぜると増えるといって、縁起をかついでミルという海草が必ず入ったという(高野さん談)。

現在と同様に、歳末から正月にかけての商家は大変忙しく、また当時は歳末が年に一回の売掛金の締め日であったから、歳末は総出で掛取りに回った。しかし、取り損なうことも多かったという。

「大晦日に締めたいから市内のお店へ掛取りに行きますと『もう二時間たってから来て下さい』、『もう三時間たってから来て下さい』とか言われるのですが、それはもう払う意志がないのです。掛取りには必ず一人、提灯持ちがつきまして、決して一人では参らないのですが、そうして何度も行つて遂に貰えないというのは限りがないそうです。明るくなる頃になると、もうあちらでは戸口をきれいに掃き清めちゃつて、お正月のようにしてしまします。『おめでとうございます』って言われると、もうそれで掛取りは出来ないのだそうです。

取れないと、次の年の歳末まで待つということになるようでございますね。お正月になると、もう貸しのことば棒引きにして新しい取引をすることだったのでしょう。」（高野さん）

大晦日に締めて、決算を行い、その結果が出たところで棚勘定のお祝をした。棚勘定は決算のお祝いで、一月の中旬から下旬にかけて、どの商家でも親戚や昔の奉公人たちを呼んで御馳走をした。商家の祝い事としては、この棚勘定が一番盛大な祝い事であつたという。

甲府の商店の正月行事としては、近郷近在にも有名な「初買い」商家からすると初売りがあつた。正月二日の午前零時を期して初商売を始めるのである。初買いは買うと、お祝儀で良い景品がつくので、寒い夜中であるにもかかわらず、大勢の人がくり出して大変に賑わつた。商家ではこの間、大変に忙しく、掃除や洗濯などをする暇もなく立ち働いたものだそうだ。春になると、お彼岸やお花見があつた。明治時代の花見処は善光寺で、舞鶴城にはまだ桜はなかつた。花見がさかんになったのは大正に入ってからのことだという。

（名取さん談）。大正に入ると「お重と甘酒のびんをつるして、子供どうしでお城へ行きました」（小野さん）というくらいに盛んになり、お神楽や芸者の手古舞が出て、にぎわつたものだそうである。夏になると、桜町、三日町見附周辺に夜店が出て、夕涼みの人出で賑わつた。秋には多びす講があつた。多びす講は商人の祭りであるが、今日のような商店の大売出しの「多びす講祭り」となつたのは昭和のはじめ頃のことだ、それまでは、商家の内々でご馳走を食べ、得意先に配り物をして祝つたものという。まち中の神社の祭礼も、現在よりも、ずっと盛大であつたということだ。そして、そうした行事の折などに御馳走をつくと必ず重箱に入れて近所へ配つた。それも、ただ入れて配るだけでなく、その家の娘が手作りした布製の「重敷」（重箱の下に敷く）と、縮緬などを使って押し絵で作つた「熨斗」（重箱の上に乗せた）をつけて回したものだそうで、各々、重敷や熨斗の美しさを競つたものという。

#### 四 まちの移り変り

大正から昭和の恐慌、戦争、そして敗戦に至る激動の時代、甲府のまちはどのようなであつたのだろうか。本項では先の三項とは趣を異にして、時代の節目々々のエピソードなどを語っていただいた。

大正時代の大事件の一つに米騒動がある。甲府市においても、米価の騰貴に抗議して米の廉売を求める大会の開催を契機に（大会は中止されたが、それを知らない人々が会場に予定されていた太田町公園に集まり、自然発生的に若尾邸へ押しかけた）米騒動が起き、山田町の若尾家が焼打ちされたのであるが、若尾家の隣りに住んでいた名取さん（当時一三才）によると次のようであつたという。

「父（名取忠愛）が市長だった頃だと思いますが、米の廉売場を甲府のあちこちに設けまして、そこで安くお米を売ったわけですね。父があちこち回って歩いてきて一〇時頃、家へ帰って参りまして、どこもいい塩梅に順調に行っているよ、と言っている時に『若尾さんの前が大変です！』って言ってきまして、見ましたら一杯の人だからで。それから間もなく放火してしまつたですね。大きい本宅が全部焼けちゃって、東側にあつたお蔵が二つばかり、そこだけ残りました。流言蜚語が飛びましてね、明日はどこを焼く、なんて。恐かつたですけど。」

私のところ、まだ祖母がおりましたものですから、何かの時に、おばあちゃんに怪我させたらいけないって、私が一番年長でしたので、私が祖母を連れて紅梅町の親戚の家に避難いたしました。あのときは甲府に四九聯隊がありましたですから、市長の家の前だからってことですか、剣付鉄砲の兵隊さんが家の前に立つておりまして、それは安心でしたけれど、えらい思いをいたしました。」

（名取さん）

米騒動は、その後の民衆運動に大きなインパクトを与え、甲府でも普選運動が高まり、また無産運動も大正一〇年頃に甲府に入つて来て、以後、急速に甲府盆地の農村に浸透してゆくのである。こうした世情を背景に、甲府の商家では大正九年頃から商家の若い人たちを中心に日蓮主義青年団の活動が盛んになり、当時、階級闘争に反対し人間愛に基づく融和を説いていた妹尾義郎が何度も甲府を訪れて、活発な講演活動を展開した。その頃の中心的メンバーには、高野毅、今井新造（甲府革新党から県議。のち衆議院議員）、太田源策（綿花商。大地主でもあったが、家督相続二年で他界した）、

雪江雪（妹尾に従つて若人寮に入寮す。戦後は共產黨員として活躍）などの人々がいた。女の人たちも日蓮主義青年団の活動には積極的に参加しており、名取さん、高野さんもその一員であった。妹尾義郎を呼んで婦人向け講演会を開催したり、桜座で関東大震災被災者への義捐金集めの素人芝居をやったりしたという。

日蓮主義青年団が、第一次世界大戦後の変わりつつある世の中の流れの中で、人々が進路を模索している時の、中堅商工業者の思想的表現とすると、大正一三年に結成された甲府革新党は、その政治的表現であろう。甲府革新党は創立宣言に「政治は国民の政治なり、豈独り政党者流のみに委すべけんや」と謳って、普選を主張し既成政党批判を行なった。しかし同時に、階級闘争には否定的で、綱領には「徳性の涵養を奨めて思想の善導を期す」と述べ、また日蓮主義青年団は、妹尾義郎が従来に融和的立場を放棄して左翼転向が明らかになってくると、甲府支部は退団したのであった（昭和六年四月）。

甲府の中堅以上の商家にとり、階級闘争は対岸の火事ではなかった。全県下の農村に拡がった小作争議は、近郊に小作地を持つている商家も、そのターゲットとしたのである。

「私が子供の時分ですが、緑町の本屋に『少年倶楽部』買いに行ったら、農民組合がムシロ旗たてて行進してきましてね。ナツバ服着た、背は低いけどタンクみたいなおっちゃんを先頭に肥料商の平原庄兵衛さんのところへ入っていった。大人の人たちが『平野力三だ』って口々に言っていました、それは、えらい勢いでした。」（原市長）

一般の商家が小作地を持つのは、投資というよりも第一には飯米

確保のためであったという。

「私もでは二〇〇俵ぐらい納めを持って来ておりましたが、父が『ここで自給自足でできるだけの土地は持っていたい、その米だけあれば、うちで一年食べられる』と申しおりました。その土地から上る米をいただくということで持っていたと私はきいております。」（高野さん）

大勢の使用人を抱えた商家では、その飯米だけでも相当の量に及ぶわけで、それを米穀商から買うよりも安く飯米を手に入れる方法として、小作地を持つ意味があった。しかし、小作争議が激しくなった後は、毎年、小作料の減額交渉に農民がやってくるようになり（名取さん談）、非常に煩わしくなっていたという。不在地主である商家は農民に小作料減免を要求された場合、一番弱い立場にあったのである。高野さんのところでは、その煩わしさが嫌で、小作争議の盛んであった頃に、小作地を全て手放したという。

甲府市は、大正八年に人口が、ほぼ六万人であったものが、同一三年には七万人、昭和四年には約八万人となつて、市街地は拡大した。そして商業も、何回かの恐慌で多くの倒産を出し、また産業組合運動やデパート進出で苦しみながらも、まずは順調な発展を遂げていった。しかし、昭和一二年の日中戦争の本格化に続く、戦時経済化、物資の統制の強化が進むにつれて、商業の発展は一頓挫を来し商店は開店休業の状態に追いこまれていった。従業員も、そして場合によっては店主も、出征するか、軍需工場へ徴用で働きに行くようなこととなり、多くの商家で収入の道が無くなったという（高野さん談）。その一方で軍需関係の製造業は、作れば作るだけ金になる時代の到来であった。パラシュート製造のための需要で潤った

製糸場は、従来の、借金で以って相場を張るような経営から「夜が明けて煙突から煙が出れば、一日で一〇〇円から一五〇円になる」（原市長談。昭和一五年頃のこと。しかし良い時代は長続きしなかった由）という繁盛ぶりであったという。

さて、戦時下、政治も総力戦体制化させてゆくということで、政党は解散して大政翼賛会が結成され（昭和一五年一〇月）、翌一六年九月には翼賛運動の実践部隊として翼賛壮年団が結成されている。この翼賛壮年団（以下翼壮と略す）は、銃後を守る壮年男性の実践組織で、県・郡市町村に各々組織をもっていたが、県翼壮の団長となったのが、名取忠彦氏である。また高野孫左衛門氏も翼壮の役員であり、昭和一七年の翼賛選挙で翼壮の推薦で出馬して代議士にトッブ当選した人である。折角の折であるので、名取さん、高野さんに裏面史などを話していただいた。

それまで甲府革新党の役員などをしながらも県会・市会に出馬することはしなかった高野氏が代議士選挙に出馬したのは、名取氏の身代りであったという。

「代議士選挙には翼壮の関係で名取さんがお立ちになるべきでしたのですが、責任者には、それが出来なかったらしうございまして、その代りに私共が立ったわけでございます。そんな器ではございませぬし、とても駄目だからって『名取さんがお立ちになるべきです』って申し上げたのですが何か、それが出来なかったのです。しかし選挙というものは面白いもので、半分くらい来ますと『負けるもんか！』って気になるんですよ。私も、じっとしていられなくなりまして、とび歩いた覚えがあります。」（高野さん）

このとき甲府市から高野孫左衛門と並んで今井新造が当選した。ともに甲府革新党のメンバーであった両者が、甲府市を舞台に選挙戦を繰り広げたので、様々の波風が立ったともいう。政友会・民政党の華やかなりし頃、代議士を一人も出せなかった甲府市から、二人も出たのは異例のことであった。

しかし、「聖戦遂行のため」、対立を捨てて挙国一致して一枚岩となれ、というのは建前だけで、翼賛体制の内部は激しい権力闘争が続けられていた。政治の世界では、野党的立場の翼壯関係の議員（翼壯議員同志会）と既成政党関係の議員（翼賛政治会）との間に対立があり、昭和二〇年に入ると、翼壯・翼賛会を解散し大日本政治会にて一元化する、また国民義勇隊をつくるという動きをめぐり軍部・官僚・既成政党・翼壯と入り乱れて激しい抗争が始まった。抗争の激しさは、緒方竹虎大日本翼賛壮年団々長に刺客が差し向けられるほどであり（名取淑子『たどりしあと』にその時の記事がある）、また名取忠彦、高野孫左衛門ともに徹底抗戦の立場であったため、甲府の家の方に、嫌がらせがされた。名取家では「座布団が五〇枚もあるのは多すぎる」と難癖をつけられ、高野家では、売りものにならなかった廃電球が蔵にたくさんあるのを取り上げて、統制令違反であると警察沙汰にされたという。

「何でも主人が大日本政治会というのに入らなかったようでございます。それで何かと抵抗がございまして、主人に傷をつけたかったですね。ですけれども主人は政治の方に関係ありますものですから、吉字屋の商売のことは何もわかりません、私が責任者ですって言いしましたものですから、私が幾度も警察へ行ったり検事局へ行ったり。嫌でした。ですけど、これは上からの指示で

あったそうで、警察署長もそう申しました。『高野さん、悪いけれど上からの指示で調べなきゃならんだから、ちいと我慢していろ』って言われるものだから、『はい』って。それで、高野きよに懲役三ヶ月執行猶予一年というものをいただきました。それから間もなく戦災でしょ。その罪はどこへ行ったですかね。戦災でむちゃむちゃになって、わからなくなってしまったようでございます。しかし、政治というものは、上の方でこうやられると、どうしようもないものでございますね。」（高野さん）

戦争が長期化するに従い、町に暮す人々は食糧が不足してきて、各家々の庭は野菜畑に変わった。そして、昭和二〇年七月六日、甲府の空襲は市街地の大部分を焼き尽し、商家の古い蔵の並んだ美しい町並は、全部灰燼に帰した。それまで幾度も大火をくぐりぬけ、毎年、暮れに「用心土の練りかえし」といって、外壁に「用心土」をつけて保全につとめてきた蔵も、焼夷弾の火力の前では、逆に炭焼窯のようになって、「お蔵の中で物を焼いたようなもの」であったそうだ。焼け出された人々は、つてを頼って疎開したり、バラックを焼け跡に建てて住んだりの暮しで、食糧事情も、戦後は戦中より厳しくなって、辛い生活がしばらく続いたのである。

## おわりに

数十年前の商家の暮しぶりの中で印象的なのは、主人も従業員も、まるで一つの家族のように暮して、ともに働いていたことである。暖簾分けをした後も、付き合いが続いたというが、それは農村において地主と小作の間にあった、親分小分関係ほどの強いものではなかったという。これは、商家の場合、小作人が地主に経済的に依存

したように、暖簾分けされた店が本店に依存することがないためだろう。しかし、「お付合いするときは、下の者には倍返ししなさい」(若宮さん談)というようなことは言われていたという。

また、商業の性格上、そのやり方によっては一代で財を築く場合もあるし、失う場合もある。一七代続いている吉字屋では、先々代の孫左衛門は次のようなことを言っていたという。

「塩を売って、利益は、その手を舐めてしょっぱいのが儲けだつて言いました。塩屋はそんなに利益のある商売じゃない。だから生活を慎んだじゃないかと思えます。そして一年のお勘定をした時に、余裕が出れば少しは使いなさいって言われました。それと、御礼なんて言われない、寄附は必ずしなさいって言われました。うちも、そういうようにしていたから、こう長く続いたじゃないかって思います。」(高野さん)

このようなところにも、それぞれの家々で長年にわたって培ってきた、暮らし方、生き方の原則の一端が示されている。今回の座談会で話されたことは、由緒ある大店の例であるが、その整った、実直な暮らしぶりに、贅沢という意味でない、質の高い生活文化が甲府のまちに育まれていたことが物語られているように思う。

高野さん、名取さん、若宮さん、小野さんには、長い時間にあたって貴重なお話をしていただき、また原市長にはご多忙の中、時間をさいてご出席願いました。深く御礼申し上げます。

## 注

(1) 今回、集まっていたいた方々のところは、いわば大企業

への就職と同じで、奉公中の訓練もしっかりとしていて将来についても安心して委ねることが出来た。しかし、そうでない商家へ「口減らし」に奉公に上った人々が多いわけで、少し古い時代であるが明治二五年一月一七日の『山梨日日新聞』には「緑町の某方、雇人のために送別の宴を聞く」という記事を載せて次のようなことを言っている。年季奉公明けには暖簾分けをするはずであるが、「実際は雇人に難題を負わせて追払い丁稚の時よりの苦辛も水の泡」ということが多いなか、開店の世話を一切やって、一族を集めて送別の宴を催すとは感心である、と。

(2) 平原庄兵衛商店にデモをかけたのは、平野力三ではなく、市史編さん調査協力員の樋口光治氏で、テレビのなかった時代なので人々は間違えたのだろう。当時樋口氏は国母村農民組合の組合長であった。樋口氏によると、商店の場合、純粹な地主のように小作料で食べているわけではないし、また営業中の店先に野良半天姿の農民に連日押しかけられたのでは商売にも差し支える、ということで、比較的あっさりとしょんねえ、引く」ということになったという。商家にデモをかける戦術は有効なので何回か使った由。

(3) 名取忠彦・高野孫左衛門・野口二郎(山梨日日新聞社長)の三人は生前大変親しくこの三人を中心にした輔仁クラブという会合があつて(昭和二三年頃)、武田与十郎(武田食糧社長)細田一郎(山梨中央銀行役員)などの人々が入っていた(前掲『たどりしあと』)。また、高野孫左衛門の政治志向を語る話として、高野きよ氏が次のような秘話を披露された。

「うちは色々な方々がみえて逗留しておりましたので、主人は、只の商人じゃないな、とは思っておりました。井上日召さんとか菱沼五郎さんとかも来られました。中には、お巡りさんがお客さんにくっついて来て、お店で待っていることもございまして、この方は主人の関係した範囲の方々では左に寄っていたじゃないでしょうか。」

その頃、私が一番心配しましたのは、主人の読んでおりました本のことで、もう、あの当時、取り上げられたら……って、戦災で焼けちゃってよかったという本が沢山ございました。手塚正次って代議士をしてた親戚が父のところへ来まして『穀はどんなことをしてるか、おっちゃん知ってるかね。今、検事局へ行ったら、穀のことを要注意人物って書いてあったぞ』って言ったものですから、父は、もう警戒いたしましたね。主人の読む本はみな検閲するものですから、ちいと都合の悪い本は、みんな紙掛けて読んでおりました。」

(4) 名取忠彦『敗戦前後』には、「戦争中私たち翼壮を中心とする一派の同志は常にこのこと（自己の権勢をはかる政治的ボスに指導されているのでは戦争に勝てない）を痛歎し、憤慨していた。殊に私など自ら同志中での急先鋒であることを自負し、所謂翼政会の如きものは、敗戦組織でしかないとの激しい批判の立場をとり、彼等と内面的に抗争し続けて来た。」（四六頁）とある。また国民義勇隊についても「私は、これは結局、無組織ということになるのだと主張し、国民中核組織の崩壊はやがて亡国の兆である、何故に翼賛会の首脳部は真剣にこの問題の為に闘わないのかとその人達を前にして嘆きつゝ絶叫したことを思い出す」（同書、三七頁）と記している。さらに国民義勇隊を戦後早々に、名取氏の手で解散した際、同志に「もう官僚どものお先棒をかつぐような運動は、これで一切お仕舞だ！」と表明した（同書三八頁）とあり、興味深い。

（市史編さん専門委員）